

隣花苑は静かな佇まいで雰囲気ある料亭であった。私の実家は木造住宅で、畳・縁側はあるが、このようなすばらしい空間ではなかった。食事をした場所は、窓の大きな開口と、その前面に見える景色が住空間にいることを曖昧な気分になせ、心地よい気分を味わえた。

さらに木造ならではの細いラインの美しさがその空間を尚いっそう引き立てて、上部の欄間部分の開口が軽やかに空間を分け、広がりを与えていたように感じた。白雲邸の廊下部分に使用している畳の丈長さが非常に長く、天井部に使用している竹のボーダーラインがさらに奥行きを与え、廊下という機能のほかに空間的なすばらしさを感じた。随所に原さんの拘りが窺えた。脱衣場では大きな空間と高い天井があり、蒸気の流れが考えられていた。また畳の部屋から眺められる三重の棟や、月・桜・雪といった木の彫り物、書斎スペースとして設けた空間がそれを物語っていた。また物置に使用されている木材が細い部材であるが堅くて丈夫なことに驚かされた。

聴秋閣は木・川・石による空間構成がすばらしく、自然と一体化しているように感じた。床材を模様の違う木材で市松貼りになっており、床から30センチほどの立ち上がりのある手摺が印象的であった。樋を竹で作っており、屋根部材を木で重ねている断面形状が、薄く綺麗であった。また窓枠が細くダブルラインで分けているものが、以前見学した池袋にある自由学園のような印象を与えた。

全ての建物を見る事はできなかったが、この広大な敷地に建物を移築してきて、原さんの思いというか、すばらしいモノを創ろうとした試みは十分に伝わってくるものであった。

